



Greetings and my approach to branding and change

経済学部経営学科長 アダム・ジョンズ (Adam Johns)



Though a year has passed since taking on the role of chair of the Department of Management, it is a pleasure to introduce myself to you all here (I am reminded of the English saying “better late than never” and its unforgiving response “...but better never late!”).

Arriving at Sophia in 2018 having taught at Rikkyo then Doshisha universities, I was ribbed by both my former PhD supervisor (an economist and emeritus professor at the Australian National University) and econometrician PhD classmates about whether I belonged in a “Faculty of Economics” (their beloved discipline of economics was safe, I assured them – my post was in the “Department of Management”).

And yet, Sophia’s juxtaposition of both economics and management/business within one faculty has felt surprisingly at home given my own interdisciplinary background (undergraduate degrees in international business and media studies, a masters degree in commerce, and a PhD in public policy) and approach to teaching and research.

This research has focused on the concepts of authenticity and place brands. Authenticity – a sense of what is “real” or “true” – has received a deluge of attention in English language literature and popular culture over the past decade but has been spared much of this attention in Japanese. It is such a convoluted and existential concept that could quickly devolve into philosophical navel gazing or academic abstraction. Yet in the “real” world, people increasingly seek authenticity in products they buy and brands they endorse. Many brands have also come to factor these consumer perceptions of their authenticity into their product and supply chain decisions as well as both internal and external branding and communications. This sense of being true not just to facts but to others’ ideals and to one’s self is particularly pertinent in a world where brands seek to evolve to stay relevant and engaging amid changing societal norms and values.

Similarly the use of place names and “place brands” has gained attention as nations, regions, and municipalities seek to raise awareness and shift people’s perceptions and attitudes towards them, whether for tourism, trade, or attracting investment and residents. Places, however, have an even trickier task rebranding themselves than organisations, given the multitude of stakeholders that contribute to both the “identity” of a place, and the lack of control over the experiences of customers, visitors, or investors.

This focus on “continuity through change” in both research areas has come to life through a student project I run that aims to transform traditional Japanese crafts (「伝統工芸」) for global markets. Started while living in Kyoto with the support and participation of local traditional artisans and merchants, this project lives on in my seminar (*zemi*) at Sophia, where each year Tokyo-based *kogei* firms work with Faculty of Economics students to reinvent or rebrand their cultural and creative craft.

Shortly after assuming the role of chair, my wife and I welcomed the birth of our second and third sons. As such, the last year has been a blur of curriculum, admissions, and “middle management” meetings, dirty nappies, and clean baby bottles (thanks to Zoom often simultaneously!), endless laundry, and yes, teaching. Amid joy and exhaustion it has been a vigorous reminder that “the only certainty in life is change” and that learning to survive and thrive amid a state of flux is not limited to our student days or classrooms but is in fact a lifelong endeavour! If any of my work sparks an interest in you, please don’t hesitate to get in touch. よろしく願い申し上げます。

上智とその国際性の原点

戸川宏一 (1963年 経・商)

著名な作家である司馬遼太郎さんの「街道をゆく 22 南蛮の道」の中に、ロヨラの妖気という箇所があります。その中の文に「しかし、思いかえしてみると、ロヨラがいなければ一さらにはロヨラが妖気をもってわがザヴィエルに迫ることがなかったなら一ザヴィエルが日本にくることもなかった。イエズス会も存在していないし、こんにち、上智大学のキャンパスのなかの多くの青春も、その場所には存在していない、ということになる。」とあります。確かに、イエズス会の創始者であるイグナチオ・ロヨラの命によって、フランシスコ・ザヴィエルが来日し「都に大学を」とローマ教皇に手紙を書きつけていなかったなら、現在の上智大学は存在していなかったということです。上智大学がここまで国際的で素晴らしい大学として発展してこられた背景には、ローマ教皇とザヴィエルにはじまり、その後日本に派遣されてきた沢山のイエズス会司祭の大変な苦勞と努力、そしてその方達の情熱によって成し遂げられた事実があります。

上智大学をここまで素晴らしい大学へと導いて下さった、今は亡き沢山のイエズス会司祭達の優しく、包容力のある顔が今も時々目に浮かびます。遠いヨーロッパから来日し私達日本人の教育のために、骨身を惜しまず全力を尽くし、上智の良き伝統をつくり、そして自分の国に帰ることなく日本で生涯を終えられた沢山の司祭達のことを考え心から感謝するとともに、私達が少しでもそのご恩に報うことができればと思っています。

なかでも、2014年に86歳で亡くなられたヨゼフ・ピタウ先生のことを忘れることはできません。上智大学の理事長、学長を務められ、数々の実績を残された後、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世に招かれ20数年間バチカンの教皇のもとで仕事をされました。20年以上離れていても自分の第二の故郷は日本だ、と言われて日本に帰って来られ、2014年に日本に骨をうずめられました。

私たち多くのソフィアン、いやソフィアンだけでなく多くの人々が本当に尊敬する先生でした。上智の教育理念を思う時、ピタウ先生の示唆に富んだ言葉を時々思い出します。第一に「あらゆる人に対して尊敬の念を持つこと」、第二に「自己の利益の為だけに他人を利用しないと固く決心すること」、三つ目は「不正に対して拒否するだけでなく積極的に不正と戦う姿勢を持つこと」でした。



筆者(左)と緒方貞子先生(右)
上智大学での会合の後で

先生はこのことを是非伝え続けてほしいと言われて亡くなられました。日頃ともすれば忘れがちな、上智の精神に基づく人としてのあるべき姿を私達に思い出させてくれる言葉だと思います。

もう一人上智で私にとって忘れてはならない方は、緒方貞子先生です。上智大学の教育理念である「他者のために、他者と共に」を実際実践され、そして上智での教育にも力を注がれ、また私達のお手本として世界に出て活躍されて2019年に92歳でこの世を去られました。まさに時代が求め、世界が求め、それに応えて率先して世界の中で活躍された生涯だったと思います。63歳で国連難民高等弁務官に就任され、難しい難民問題に自分を犠牲にして尽力され、その後も開発途上国への国際協力機関であるJICAの理事長を務められた緒方先生は、日本にとっても世界にとってもかけがえのない素晴らしい方でした。

私たち卒業生は、上智大学という場で教育を受け、上智の教育理念を知ることができたという共通点があります。ピタウ先生、緒方先生が上智の教育理念の実践者として、国際人としてお手本を示してくださいました。私たちも上智の伝統と理念のもとに自信を持って、国際社会の中で活躍していきたいものだと思います。また、今、ウクライナで起きている事態は、世界平和を願う私たちにはとても受け入れられないことです。悲惨な状況下にある人々が、一日も早く平和な社会を取り戻すことができる様、祈りたいと思います。

最後に、私がソフィア会会長として務めた3年4ヶ月は、ソフィアンの皆さまのご支援とご協力により、無事にその職務を全うすることができました。改めて皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(前ソフィア会会長)

インドネシアと私

田口忠晴 (1973年 経・経)

インドネシアと私との関係は、大学卒業後に当時の松下電器産業株式会社（現パナソニック株式会社）に入社した翌年に、海外研修生としてパナソニックとの合弁会社に2年間派遣された事に始まります。それ以降4回の赴任で合計26年間インドネシアに暮らしました。今はコロナ禍である事と自分の年齢と体調を考え、昨年末に日本に帰任し、GOBELグループの日本代表として働いております。

私のこの長いインドネシアでの経験の中で一番印象的な出来事は、1997年のアジア通貨危機を発端に1998年に発生したジャカルタ暴動です。この暴動をきっかけに32年続いたスハルト政権が崩壊、華僑資本の流出、99年に実施された総選挙、さらに東ティモールの独立運動が連続して起こり、インドネシア経済に大きな打撃を与える事になりました。このような激変の中で経営責任者として、この歴史的瞬間に現地には後で考えると貴重な体験であったと思います。

特に1998年5月12日のジャカルタ暴動は経済活動に壊滅的な打撃を与え、GDPはマイナス13%、通貨ルピアの600%の下落、金利45%の暴騰となり、大変な状況に陥りました。当然この事は私が働いていた家電業界にも大きな影響を与えました。首都ジャカルタにある我々の116店ある取引先の電器店は58店が焼き討ちに遭い、かろうじて焼き討ちに遭わなかった店も略奪の被害を受けました。インドネシアから逃げ出した華僑もいたため、売掛金も回収出来ずにこの先どうなるかと愕然としたことを覚えています。このような状況からの復活、一企業としての必死の生き残りの

実践については、また別の機会にお話しする事として、このような暴動発生時に感動した体験についてお話ししたいと思います。

アジアの通貨危機でインドネシア通貨のルピアが下落し始め、景気が悪くなる中で物価の上昇、一般のインドネシアの人々の生活は徐々に悪化。食料品を買うのも困難という状況に陥り、ついには食べるために略奪が起こるなどの悲惨な状況の中、私が働いていたグループでは、朝7時までに会社すればパンを無償で配給、昼食も無償で提供し現地の社員を守りました。そうしたある日、私も食堂で昼食を摂っていると、隣で若い女子社員が大皿に大盛のご飯をよそって食べている姿を見かけました。思わず「すごい食欲ですね」と声を掛けると、彼女は「私の家は裕福ではないので昼食が無料で食べられるのは大変ありがたいです。会社に感謝しています。昼食を沢山食べて夕飯は食べないで我慢しようと思います。」との返事。思わず胸が締め付けられる思いがしました。

暴動が発生した5月12日、会社の前の通りには大勢の暴徒が暴れまわり、向かいの自動車販売会社のショールームのガラスを割って侵入。展示してある車を引きずり出し、ひっくり返して火を付け喚声を上げるなど、まるでこの世の終わりのような状況が目の前で展開されていました。そうした状況にあるにも関わらず、我が社には何も起こらず、そのうちに近所の住民が手をつないで正門に人間バリケードを作って守ってくれている姿に驚きました。彼らは「この会社は私たちの会社だ。インドネシアの



1998年暴動発生直後のパナショップ店



グロドックの家電卸店街（インドネシアの秋葉原）

会社だ。絶対に危害を与えてはならない。」と大声で叫んでいました。何故こうした事をしてくれるのかと聞いたところ、私の働いていた合弁会社のインドネシアサイドのオーナーである Mr. GOBEL が個人で、経済状況が悪化し、暴動が起こる約一か月前から「米、砂糖、塩、食料油」を入れた「スンバコ」という袋を近所の各家庭に配ってくれた事への感謝の気持ちだと教えてくれました。会社にはイスラム教の寺院「モスク」があり、毎週金曜日の礼拝のときには近隣住民にも施設の開放をしていたのですが、その事に対するお礼の気持ちだという返答でした。私はこの一連の事に大変感激したと同時に、この会社に出向できた事に喜びと誇りを持ちました。私も微力ながらこの国の発展のため、この国の人々のために何か貢献したいと、当時心に誓った事を思い出します。この時の気持ちは今も変わらず持ち続けており、この年までこの会社で働く原動力となっております。

続きましてこの暴動で被害に遭った取引先の再建・復興をどの様に実行したかをお話したいと思えます。

暴動から数日後、まだ焦げ臭い街に出て、略奪・焼き討ちに遭った店の状況を見に行きました。現場付近は関係者以外立ち入り禁止だったので、新聞記者と偽って店の中に入ったところ、その店の主人と偶然会い、二人で現場の惨状にただただ呆然としておりました。しばらくして主人が「これからどうしたら良いのか頭が混乱して全く見当がつかない」とポツポツと話し出し、それから長い間話し合いました。その時に書いたメモをベースに対策を立案し、横展開をして取引先の復興を実施しました。その際のメモの内容（彼の要望）は非常にシンプルなものです。

- (1) 被害に遭った店の後片付けをするのに人手がないので助けて欲しい。
- (2) 販売活動も出来ない所以資金がなく、今月の支払いが出来ない。また今後の取引条件はどのようなになるのか教えて欲しい。
- (3) ルピアが大幅に切り下がり（1ドル当り2,500ルピアが16,000ルピアになった）、商品の値段がどの様になるのか。
- (4) 他メーカーからは、当面商品供給が出来ないとの通知が来ているが、商品供給をしてもらえるか。
- (5) 商品は全て略奪され、また置いても盗られたら恐いので当面の間カタログを棚の上に並べて置こうと思っているがどうか。それとも商品が無償で提供してくれるか。
- (6) 壊れた陳列棚や看板を無償で提供してくれるか。

内容は至極シンプルではありますが、どれも実施するには従来のシステムを大幅に変更しなければならないとか、会社の各部署での調整、取引先への説明や合意が必要で、かつ緊急性が高いので短時間で対応しなければならず本当に大変でした。

メモ(2)の支払いについて少し詳しく説明させていただきます。

支払いについては、5月現在は当面支払わなくて良いので、店の復興に集中して下さいと返事をしました。会社としては売掛金の回収がないと資金繰りが苦しくなるし、銀行から借入をしなくてはならなくなるので、保険会社にその分の補填をして欲しいとお願いし、回収が出来た分は返済するという条件で認めて頂きました。一年後98%が回収でき、保険会社もこんなにきっちり返済されるとは思わなかったと驚かれました。

取引先に、今後は現金での支払いをお願いしたところ、「他メーカーが暴動以降誰も来てくれない時に親身になって対応してくれ、他メーカーが商品供給をストップしている時も供給を続けてくれた恩を考えると、現金取引は厳しいけどお受けする」と言ってくれた時は、胸が熱くなりました。

その現金回収システムは、毎月1日から24日までの売上げ合計金額を25日に回収するという、最長24日間のクレジット付きのシステムでした。店舗からすると月初に仕入れた方がクレジット期間が長くなりますし、我々にすると販売スピードが上がり、従来、月末集中の売上げ体質であったものが、目標金額に対して5日で30%、10日で90%、15日で100%と大幅に改善されました。25日以降は翌月の商談をして、それをPSI（仕入れ、販売、在庫）に反映していくパターンが出来上がり、経営体質が画期的に改善されました。当月仕入れ、当月販売、当月回収が出来、月末在庫も大幅削減され、市中金利が45~70%という状況の中、念願の無借金経営が達成出来、未曾有の危機を乗り越えることができました。

私のこの経験で言える事は、やはり現場、現物、現実主義の大切さであります。その実践にはその国の習慣、文化、行動様式を理解している事が前提となりますし、手段としての現地語（インドネシア語）の習得が必要となります。

最近のグローバルスタンダードという考えの中、英語が出来ればそれで良い、現地の言葉を勉強する必要がないと言う人が増えてきて、インドネシア語を話さない、話せない出向社員が多くなってきており、誠に嘆かわしい事だと思います!!

(GOBEL グループ 日本代表)

イエズス会の宝、我らの誇り「宣教師の見たその日」の編集に携わり・・・

菅田万里子 (1966年外・仏)

昨年(2021年)暮れに経鶯会会長の田村様より「経鶯会の会報に冊子について寄稿をしたら如何ですか」とのご提案を、長年ソフィア会で仕事をしていた剣持睦子様を通し伝えられました。外仏卒の私が?と一瞬戸惑いました。私は、2008年に、ちょっとした機会に、山梨ダルクと出会い、薬物依存に苦しみ社会復帰を願いながらも社会から理解されず苦しんでいる彼らの姿に深く心を揺さぶられ、以後2009年に山梨ダルクを支援する「ぶどうの木 in 湘南」を立ち上げ今日に到っております。社会に正しくダルクを理解してもらう事を目的にしております。その為に、毎年、講演会、音楽会、バザー等開催して僅かながらダルクに寄付して参りましたが、ご承知のようにこの2年は例年のようなイベントが出来ない状況でございます。しかしダルクへの寄付を絶やすことは、あきらめたくないないので、私は何か良い手立てはないかと検索してありましたところ**一わが命つきるとも一**のチラシを見つけました。これは原爆投下されたその日の記録動画で当時、広島には16名ものイエズス会士がおいでになりました。早速「これだ」と思い、この日の関連資料を探したところ、被爆なされた司祭方4人の方々の手記を残されていることが判明しました。この司祭方の手記を冊子にして来場者には、冊子を500円で販売し利益をダルクに寄付しようと考えました。しかし残念ながら、この記録動画鑑賞会も取止めを余儀なくされました。

しかし、この4名の司祭たちの手記は深く心を揺さぶられるものであり、是非とも冊子として完成しようと思いました。その為に教皇ヨハネ・パウロ二世来広(1981年2月)10周年記念として編集された「戦争は人間のしわざです」(すでに絶版)

より4人のイエズス会司祭方の手記を抜粋する許可をイエズス会日本管区にお願いいたしましたのが昨年(2021年)の夏でした。

司祭方の手記を読み終え、人間はとかく自己本位のエゴイズに落ち入りがちですが、いざと言う時にどのように、他者のために行動するべきかをこの司祭方の献身的な行動によって教えられ深く感銘を受けました。

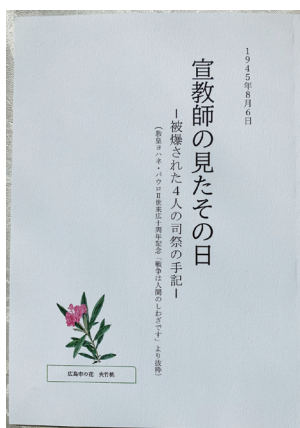
幸いなことに、イエズス会日本管区からも「司祭方の手記は宝です。宣教師達の熱意と愛が多くの人々に広められ、人々に勇気を与えられることを祈ります」というお言葉を頂戴いたしました。上智大学の卒業生にも是非ともお読みいただき共感、共鳴して頂けたらと思いました。この小冊子は国立原爆死没者追悼平和祈念館でも展示して下さるようです。

私共のグループはごくごく小さなボランティアグループですが、既にこの冊子をお読み下さった多くの方々、東京、神奈川、広島県は勿論のこと、山梨、長野、茨城、栃木にも広がり感動したとの感想を頂戴しております。私達のグループは「ぶどうの木」の名前を付けておりますが、ぶどうの木はその枝を横へ横へと伸ばしていきます。その名の通りに私達の活動も予期せぬ伸びをしていると実感しております。

イエズス会の大学、ソフィアに在籍したからこそ、この手記に出会いました。この喜びと感謝を改めて日々感じております。

経鶯会ソフィアンの皆様にもこの感動と喜びを是非とも味わって頂けましたら幸いと願い、この会報に寄稿させて頂きました。

(ぶどうの木 in 湘南・代表)



イエズス会日本管区長補佐の山岡神父様に完成した冊子をお持ちした時の写真。
右から二番目が筆者

女性は弱者？

福田順子 (1968年 経・経)

岸田政権が昨年10月にスタートした。とくだんの変化もなく、意思決定能力の弱さに期待外れの感は否めない。野党に安心材料を提供したような気もする。

今回の総裁選で少し変化があったとすれば、女性の総裁候補者が2名登場したことである。もしもどちらかが選ばれたら、面白いような恐ろしいような複雑な思いが交錯する。女性総理誕生にはもう少し時間が必要かもしれない。その中で野田候補の主張が少々、気になった。彼女は「女性、高齢者、障害者などの社会的弱者への支援」を訴えていた。敗戦の弁では、こうした弱者に光が当てられたことで立候補した意味があった、と強調していた。

ちょっと待って。私は、高齢者であり、女性であり、障害者（身体障害4級・軽度である）で、間違いなく、彼女の言う「社会的弱者」である。しかし、これまで一度も弱者と思った事も経験もなく、逆に得する事のほうが多かったと感じている。福祉を専門とする知人によれば、「福祉の関係者ほど、差別意識が強い」との事、つまり「何かをしてあげる人」と「していただく人」という関係性を創り出し、あたかも弱者を思い遣っているかのような自己満足や誤解をしている人が多い、との意味である。

すでに後期高齢者の域に達した私であるが、長い人生の中で、弱者だから損をした経験はない。周囲の思い遣りやよい環境に恵まれたのかもしれないが、思い出の中に、女性だから、障害者だから、そして最近は高齢者だから、「悔しい」とか「差別だ」という記憶はない。出身の宮崎県は、女性を大切にす、もしくは差別をしない県民性を持つ県である。その宮崎県には『いもがらぼくと』という民謡がある。県民性を象徴した民謡なので、一番と二番の歌詞を紹介しよう。（日向弁によるユーモラスな歌詞と、音頭調の浮き立つような節回しが受けて宴会などで歌われる。曲調は2分の1拍子のリズム感あふれる曲）

一番 へ 腰の痛さよ 山畑開き
春はかすみの日の永さ
焼酎五合の寝酒の酌に
おれも嫁女(よめじょ)が欲しゅうなった
* ヤレ もろたもろたよ

いもがらぼくと
日向かぼちゃのよか嫁女
ジャガジャガマコチ エレコッチャ
(*はお囃子)

二番 へ 鞍に菜の花 ヒヤラヒヤラヒヤッと
七つ浦から赤毛布(赤げっと)
可愛い嫁女はシャン シャン馬よ
今年しゃ田植えもふたり連れ

* 一番と同じお囃子

注：意味は「“いもがらぼくと”が日向かぼちゃのよい嫁をもらったよ。本当だ本当だ、まことに素晴らしい事だ」

この歌詞は、男性を“いもがら”、女性を“日向かぼちゃ”に例えており、日向(宮崎)の男女の特徴を言い得て妙である。いもがらとは、「芋の茎で作った木刀の様なもので役に立たないものをいう。」(「宮崎県方言辞典」原田章之進 編)で、「純朴でお人よしの日向男性を(いもがら)に例え・・・」(出典は同じ)、日向かぼちゃとは小さいけれど実がしまった気立ての優しい日向女の事で、あまり役に立たない男性に対して、小さいけれどよく働く女性、という対比である。

この民謡にあるように、宮崎には女性を賞賛し大切に思う気質があるが、元をたどれば「天照大神」に由来するのかもしれない(詳細は省略)。「いもがらぼくと」達は、この民謡にとくに怒るでもなく自虐的でもなく、自慢げに?愛唱する。人のよい日向男子たちである。

こうした県に育ち、キリスト教の大学で学び、女性優位発想の男性所長の研究所で自由に研究し、ジェンダーを特色とする大学に奉職した私は、女性だから、女性のくせに、という言葉を受けかけ



みやざき
黒皮かぼちゃ

られたことがないのは当然で、恵まれた環境であったかもしれない。

今は、社会全体が女性・シニア・障害者を活用しよう、という空気になっている。上から目線の弱者という言葉はすでに当てはまらなくなっている。企業・医療・教育・政治、あらゆる現場で、頑張る女性・高齢者・障害者が活躍できる環境は整いつつある。今回のパラリンピックを見た人は、パラアスリートが弱者とは誰も思わなかったであろう。逆に“すごい”と賞賛の言葉を送りたいはずである。

さて、上智大学の現状でも女性優位が数字に表れている。1年生から4年生の在学生総計の男女比は、39%対69%（2021年度）で、女子学生が7割を占めている。男子学生が多い学部は、経済学部と理工学部の2学部のみで、他の7学部はすべて（神学部含む）女子学生が半数以上を占めている。時代の最先端を行く上智大学である。

経済学部の場合、57%対43%で男子学生がやや優勢であるが、その差は毎年縮まっている。我々の時代は経済学部の女子学生比率は4～5%程度で

あったから、隔世の感がある。もともと economy の語源はギリシャ語のオイコノミア (οικονομία) で、家政（家の管理）を意味する言葉であったから、経済学は女性に向いている学問分野かもしれない。

弱者ではなくなりつつある女性たちであるが、社会的訓練の歴史は浅い。開かれた機会を有効に使って、女性も少しずつ経験を積み重ねて実力をつけ、誰からも敬意を表される優れた人間に成長しなければならぬ。

経鶯会女子部会も、男性会員の応援もあり、年2回の勉強会や、ASFでのイベントなどでは地味ながら活躍している（と思う）。コロナ禍で勉強会は2年延期となったが、2022年には、「女性活躍のパイオニア 津田梅子（仮題）」をテーマに、木藤まどか先生による講演会を計画している。老若男女どなたでも参加は自由であるので、実現の暁には、是非、ご参加いただきたい。また、女子部会にご参加いただける女性は、ご連絡をお待ちします。（jfukuda1308@ybb.ne.jp：福田まで）

（経鶯会副会長）



「日向かぼちゃ」（嫁女）と「芋がらぼくと」（婿）
毎年「宮崎神宮大祭」で、7つの市を代表するミス・シャンシャン馬が行列を作って行進

経鷲会奨学生からの礼状



「経鷲会研究奨励金」・「経済学部・経鷲会奨励金」授与式（ZOOMにて）

渡邊勤太郎（経・経 3年）

この度は、経鷲会研究奨励金授与者にご推薦いただきまして、誠にありがとうございます。このような奨学金を頂きますこと大変うれしく思います。

私は2019年に上智大学に入学し、現在は上智大学の交換留学制度を利用してアメリカのテキサス大学オースティン校に留学しております。3年次からは倉田准教授のゼミに所属し、発展途上国が抱える様々な社会・経済問題についてデータ分析に基づいた政策提言のための研究論文を作成しています。その他、昨年まで経済学科のプテンカラム教授が顧問を務める「めぐこ」というNGO団体の副代表を務め、インドとフィリピンの子どもたちを対象とした教育支援に従事しておりました。また経済学科開講の「開発援助論」という授業を担当されていた小林教授にご紹介いただき、JICA

の講座等に参加させていただきました。

自身の大学生活を振り返ると、上智大学、特に経済学部には、多くの機会を提供していただきました。そのため上智大学に入学したことに大変満足しておりますし、卒業後は経済学部の同窓生として様々な形で恩返しできればと思っています。とはいえ上智大学の卒業まで1年間ありますので、残りの時間を大切にし、奨学生としてより一層勉学に励みたいと考えております。

現在も新型コロナウイルスが猛威を振るっている状況が続いておりますので、経鷲会の皆さまにおかれましては、どうかお身体に気をつけてお過ごしください。

渡辺編香（経・経 3年）

経鸞会研究奨励金を授与していただき、誠にありがとうございます。このような奨学金を頂いたことを大変嬉しく思っております。また同時に、今後ご期待に添えるよう、より一層勉学に励んでいきたいと思っております。

私は2019年4月に入学し、経済学科で学業に勤しんできました。経済学科の先生方は魅力的な方が多く、授業も基礎的なものから、英語で経済学を学べるものまで、幅広く開講されているため、非常に楽しんで勉強に取り組むことができます。新型コロナウイルスの影響でしばらく大学に通うことはできませんでしたが、上智大学で出会った素敵な仲間たちと励まし合い、充実した大学生活を送ることができております。最近では、蓬田守弘先生のゼミに所属し、国際経済学に関する研究に力を入れて取り組んできました。実際にグループでの研究も行い、他大学の方々の前で研

究成果を発表する場も設けていただきました。

来年も濃密で意義のある研究ができるよう、より一層勉学に勤しんでいこうと思っております。そのためにも、今回多くの経済学部生の中から奨学金の受給者として採用していただいたことを重く受け止め、給付していただいた研究奨励金は、学業と就職活動のために有効に使わせていただきます。

また、このような機会を通じて、卒業生と現役生との繋がりを実感することができ、大変嬉しく思っております。今後社会に出ましたら、このように皆様から温かく心強い御支援をいただいたことを忘れず、今度は自分が現役生を支える立場として、全力でサポートしていきたいと思っております。そして、上智大学で学んだことを生かし、上智大学、そして社会の更なる発展に貢献できるような人材になりたいと考えております。

河野龍聖（経・経 3年）

この度は、経鸞会研究奨励金を授与していただき、誠にありがとうございました。思いがけない受賞で、私自身、驚きを隠せずしておりますが、このような栄えある賞に選定していただいたことを大変嬉しく思います。

私は2021年の春に上智大学経済学部にて三年次編入させていただきました。それまではアメリカの二年制大学でリベラルアーツ学科に所属し幅広い学問に触れていたのですが、卒業も間近に迫った頃、経済学と数学を両方学べる日本の大学に編入したいという目標ができました。アメリカと異なり、日本においては編入学は一般的なものではなく、ましてや海外からの編入を受け入れている大学は決して多くはありませんでした。しかし、多様な価値観を受け入れる文化のある上智大学には、海外からの編入学制度が整備されており、さらに経済学部では、私が興味があった経済数学を学ぶ環境が整っていました。その事実を知ったときは、その運命的な出会いに心が震えたことを今でも覚

えています。編入試験を受けた当時、面接をしてくださった経済学部の先生方をはじめ、私を上智大学経済学部の一員となることを認めてくださった全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

実際に入学した後、私の期待を遥かに超える優秀な先生方と学生に出会うことができ、この1年間は非常に充実したものであったと今振り返ります。改めて、上智大学経済学部にて三年次編入しようと思った私の過去の決断は間違っていなかったと確信しました。このようなレベルの高い恵まれた環境の中で、残りの一年間、果たして私は何か貢献することができるのだろうかという一抹の不安もありますが、今後は奨学生としての自覚を持ち、より一層勉学に励んで参りたいと思っております。

最後になりましたが、先生方のみならず、これまでの経済学部 OBOG の先輩方、そして何より私たち後輩の勉学を献身的にサポートして下さる経鸞会の皆様に、改めて心からのお礼を申し上げます。



鈴木貴大（経・経 3年）

この度は、経鸞会研究奨励金を授与していただき誠に光栄に思います。心よりお礼申し上げます。

私は2019年に経済学科に入学し、今年度までの3年間で卒業単位124単位中122単位の授業を履修してきました。経済学科では、個性的で様々な専門分野を持たれている教授方が多様な講義を開講されており、自分の興味を中心に幅広く経済学について学ばせて頂くことができたと感じております。

私が参加した英語特集プログラムのように、多くの講義が英語で開講されていることなど、多様な学習機会が用意されていることにも、とても学習意欲が刺激されたように思います。また、3年生より経済学科蓬田守弘教授が担当なされている蓬田ゼミに所属し、国際経済学について専攻しております。直近のゼミの活動では、漁業の国際市場についてグループでの研究・論文執筆を行い、他大と合同で開催されたインゼミにて研究報告を

行いました。

学業以外の活動では、昨年度、今年度の2年に渡り経済学科のヘルパーとして新入生のサポート活動を務めさせて頂きました。自分の学業経験をもとに学科への恩返しをする機会だけではなく、新入生と関わる中で貴重な自身の成長機会を頂いたと感じております。

さらに課外活動では、私は文武両道を目指し体育会男子ラクロスに所属しております。現在ラクロス部には経済学科12名、経営学科7名の計19名の経済学部部員が所属しております。上智大学の名前を背負って戦う者として、今後とも自分を含め部員一同、皆様に活躍する姿をお見せしていきたいと思っております。

学部での学生生活は残り1年程となりましたが、皆様から奨学金を頂いたことを励みに、学生生活最後まで、学業・部活動共に、文武両道に邁進していきたいと思っております。

福田桃子（経・営 3年）

この度は上智大学経済学部経鸞会の研究奨励金授与者に推薦、そして採用いただき誠にありがとうございます。上智大学生として、また、経済学部生として大変光栄に思っております。このような素晴らしい機会に恵まれたのは、自分の力だけでなく、支えてくれた家族、共に学んだ友人、学びをもたらしてくださる先生方のお力添えがあったことです。

幼少から“ケチ”だった私は、価格がどう決まるかという点について小学生の頃から関心を持っていました。また、高校2年次の1年間のアルゼンチン留学にて、アルゼンチンが経済的に不安定という事実から経済政策について興味を湧きました。帰国後は起業家に憧れ、ビジネスモデルや経営戦略についての本を熱中して読んでいたことを覚えています。経済学と経営学、どちらも興味があった私にとって上智大学経済学部は知的好奇心

が満たされる大変魅力的な場所です。講義にて養った“社会”と“会社”をさまざまな角度から捉える力は、卒業後にどのような道に進むとも重要な力になることを私は確信しています。

高校までの勉強は「勉強しなければいけないもの」でしたが、「勉強したいことを勉強できる」大学生活は非常に刺激的なものでした。しかし、その生活も新型コロナウイルスの影響で一変してしまいます。仲間たちと共に議論できないこと、双方向の講義が減ってしまったこと、講義後の先生とのコミュニケーションが取れなくなってしまうことは想像以上に悲しく、今までの環境がいかにも恵まれたものだったかを実感しました。状況がどうなるか不透明な中ではありますが、これからも学びを最大化させるために如何なる環境でも目標に向かって更に精進していきたいと思っております。

長田(おさだ) もなみ (経・営 3年)

この度は、上智大学経鷲会研究奨励金を授与していただき、誠にありがとうございます。このような奨学金をいただいたことを大変光栄に思っております。残された1年間もより一層勉学に励んでいかなければと、身の引き締まる思いでございます。

私は大学生活において、「一つの物事を多角的にみる広い視野を身につける」ことを目標としておりました。これを達成するために、専攻している経営学や他学部の学問に関する知識を身につけることはもちろん、ゼミナールにおける研究や学生団体での活動などを行い、視野を広げる努力をして参りました。その結果として、このような名誉な奨学金を頂く事ができ、大変嬉しく思っております。給付していただいた奨励金は、専攻に関わ

る文献購入の費用に充てさせていただきたいと考えております。また、私は経営戦略に関する学問を扱う網倉久永教授のゼミナールに所属しており、来年から新たな個人研究を始める予定です。その活動に関わる費用として有効に使わせていただくことで、濃密かつ意義のある研究に励んでいく所存でございます。

今後は経鷲会の奨学金生に選ばれた者として、より一層精進してまいります。また社会に出た際には、広い視野や上智大学で学んだことを活かし、現役生を支えることで上智大学の更なる発展に、また世界の発展にも貢献していけるような人材となることが皆さまへの恩返しになると信じ、精一杯努力していく所存です。誠にありがとうございました。

大橋正都 (経・営 3年)

この度は、経鷲会研究奨励金を授与いただきまして、誠にありがとうございます。部活やサークルの代わりに継続している馬術の競技会のための練習や、アルバイトに日々励む中、学生の本文である学業を怠らずに励んできたことを評価していただいたこと、大変喜ばしく感じると同時に、残りの1年間もご期待に添えるよう勉学に励んでいきたいと考えております。

私は2019年に入学し、1年生の1年間を東京で過ごしました。初めて、寮生活という集団生活を経験し、慣れないながらもアルバイトや月2回馬術の練習に実家に戻るなど、忙しく生活しておりました。そんな中でも、入学前からぜひ受講したいと考えていた国際市場における日本の伝統産業の動向について学べる Johns 先生のゼミに入るべく、日々勉学に励んでおりました。現在は念願の当該ゼミに入り、日々学びを深めております。

2020年に入り、コロナウイルスによる緊急事態宣言の発令、蔓延防止対策の施行により、東京から実家に戻ることとなりました。その時から現在までの約2年間、大学に通わず実家で講義を受講する状態が続いております。学びたいことを学べるという贅沢な環境ではありながら、日に日にモチベーションが低下していく毎日が続いておりました。その中でも、環境・状況に負けずに勉学に励んだ結果が評価されたこと、嬉しく思うと同時に、それを評価していただけるこの環境に大変感謝しております。

今後は、奨学金をいただいた生徒としての自覚を持ち、自身の将来の目標である「国境を越えて人々の生活に豊かさをもたらすことのできる人材」になるべくこの環境を支えてくれる経鷲会の皆様、両親、友人、先生、職員の皆様への感謝を忘れず、日々勉学に励んでいく所存であります。

経鷲会だより

感染拡大はようやく峠を越えたものの未だ収束までは至らず、行きたい場所や行事との両睨み、心の中でのせめぎ合いが続いている令和4年の春です。長い自粛の間には、平常ではまず読まないであろう本を読み、動画も新旧取り混ぜて大量に見ました。そして、オンラインならではの長所も実感しつつ、やはりリアルには勝てないことがよくわかった気がします。この状況の中、毎月オンラインで行っている経鷲会役員会でも「しみち通りのあの店は大丈夫かな？」という話題がよく出ています。

昨年5月26日(日)に開催されたオールソフィアンのつどいでは、経鷲会フォーラムをオンラインで開催しました。今年は5月29日(日)にリアル+webでの開催となります。しかしながら飲食不可のため、恒例のSJガーデンでの経鷲会ワインセミナーに代わり、教室での茶話会「経鷲会ホームカミングデー」を開催致します。詳しくはソフィア会ウェブサイトをご覧ください。また、毎年秋に開催される経鷲会総会及び講演会は、11月12日(土)に学内で開催できるように準備を進めてまいります。その際には、皆様奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

その他、女子部会主催の勉強会、ゴルフコンペ、柴又散策、狂言や歌舞伎の鑑賞会、埼玉スタジアムサッカー観戦等は依然として順延が続いており、ミニ企画の新バージョンとして、最近リニューアルされたイルミネーションが美しい大井競馬場ナイトレース見学も立案中ですが、実現はまだ先の事になりそうです。

現在の状況では経鷲会として大きな活動はなかなか困難ですが、その維持運営や、学内では特筆される成績優秀者への研究奨励金の授与には皆様からのご支援が欠かせません。2022年度は7名にそれぞれ10万円を授与しました。経鷲会会費および寄付金をお納め下さった方には、母校の写真をはがきに仕立てたお礼状を差し上げております。未納の方は同封の振り込み用紙にて、2022年度会費の納入をお願い致します。

なお、エコノミアンのバックナンバーはソフィア会のホームページから入り経鷲会ブログでご覧頂けます。これからも経鷲会は、多岐に渡った企画を立案致す所存です。皆様のご参加をお待ちしています。

三輪一夫 (1978年 経・営)

エコノミアン編集雑記

『ソフィアの鷲 その⑧』

去る2月27日、久しぶりに四谷キャンパスに1971年卒業の同期270名余りが集まり、金祝の式典に参加しました。コロナ禍の影響で約一年遅れの式典でしたので、卒業後51年の年月が経過した訳ですが、学長、理事長、ソフィア会会長の温かいご祝辞をいただいた事や現役応援団とチアラーによるパフォーマンスで元気づけられた事はもとより、何より卒業以来久しぶりに懐かしい顔に会えたことが、とても嬉しい時間でした。歩んだ道はそれぞれ異なり、風貌もずいぶん変わってしまいましたが、同期の人々の顔を見ると一気に学生時代の気持ちに逆戻りするのは不思議なものです。人生の黄昏を迎えて自身の歩んできた道を振り返ることが多い今日この頃ですが、改めて四谷キャンパスで過ごした4年間に得られたものがいかに大きかったかを痛感した瞬間でもありました。

さて四年余りこのEconomyan誌の編集を担当してきましたが、次号から大武宏至さん(1978年 経・営)にバトンタッチ致します。これからも引き続きご愛読いただければ幸いです。

ソフィアの鷲よ、永遠なれ!

ソフィア会募金委員長 戸川 清 (1971年 経・経)



～年会費納入のお願い～

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。